



ブレーメンの
音楽隊

長瀬由加

ネコの場合。

「ソレデハ、ナツヤスミヲ ユウイギニ スゴシテクダサイ」
この言葉とともに、夏休みがやってきた。

彼の通う河上高校の制服を着て、ネコは軽音部の部室に居た。
小さく奏でるのは、彼のお気に入りのキーボード。
先輩から譲り受けたそれは、いまだにバリバリの現役で、ライブでは梟が弾く。
梟については、また今度。
今は、ネコの番。

ネコは、小さく欠伸をした。

ネコ。

本名、金子雅啓(カネコマサヒロ)。
新生は先輩たちから呼び名をつけてもらうのが軽音部の伝統だった。

「カネコだから、ネコね」

なんとまあ安易なネーミングセンス。
でもネコはひそかにこの呼び名を気に入っていて、その呼び名は軽音部を抜け出し、クラスの友人からもネコと呼ばれるようになった。
それは、ネコにとってとても嬉しいことだった。

河上高校軽音部ヴォーカル担当。
軽音部副部長。
ひょろい、が良く似合う黒髪の高3は、黒淵眼鏡を愛用する。
(ここでの"ひょろい"は、だいたい180cmくらい)

ネコは、また欠伸をした。

「さて、どうしようかな。今年の学祭は」

パラパラと、梟の書きかけのスコアをめくると、一気にネコは吸い込まれた。
そこに広がる♪、♪、♪

どんなフレーズになるんだろうと、想像(妄想に限りなく近い)を膨らませる。

ネコはまた、今度は小さく欠伸をした。

「・・・今日俺、ものっそい眠たい」

駐車場の猫はなんとやら
ほら、あのデュオだって歌ってるじゃないか
猫は欠伸あってこそ
ネコだってそれは変わらないんだよ

そうしてまた、ネコはキーボードを撫でた。
卓の書いた♪が、溢れた。
こうやって、紙の上の♪は命を吹き込まれて生まれていく。

「さて、どうするかな」

ネコはまた、小さく欠伸をした。

夏が、始まった。
今年の学祭で、ネコたちは軽音部を卒業する。

最後のライブ。

早く、練習しようぜみんな

まだ、曲も決まっていないことは内緒にしておくことにしよう。
副部長である彼の名誉を守るために。

兎の場合。

河上高校、3年2組。

誰一人、担任の話を「聞いて」いる者はいない。
早く夏休みが始まると、誰もがそう待ちわびている。
そこに、兎はいた。

兎。

本名、月島渉。

身長155cm、AB型。普通。本当に普通。

得意な教科は音楽。好きな教科は英語と世界史。

得意と好きは、全くの別物であるというのが、兎の持論だった。

兎と呼ばれるのは、嫌いではなかった。

この高校に入るきっかけを作ってくれた、憧れの先輩が付けてくれた呼び名だった。

その、学祭が近い。

担任の話が終われば、夏休みになる。

先輩も、3年2組とかだったなそういえば

大学でも、ギター弾いてるのかな

趣味は、ギターを弾くこと。

ギターは唯一の友であり、唯一自分でいられるのが、ギターと一緒に居る時だった。

幼いころに父親からもらったギターと一緒に居る時が、一番の幸せだった。

いつだっただろう、あのギターをもらったのは

幼稚園？小学校？中学校？

...中学校

ふ、と小さくため息をつく。

中学の時の”オモイデ”が、脳裏をよぎった。

軽く、吐き気を覚えた。

担任は、受験生の心構えについて熱弁している。

3回も浪人しといて、何が夏を制する者は受験を制する、だ。

制するのに4回もかかっている担任の話なんて、どう聞けというのだ。

学歴で人を判断することほど哀れなことはないけれど、いまいち説得力がないな、と兎は思う。反面教師にして頑張れよと言いたいのだろうけど、全く共感できなかった。

もう、いいや

担任の話を書くのはやめにして、兎は学祭で演奏する曲を考え始めた。

スコアが頭の中で次々に開かれていく。

自然と、人差し指がリズムを打っていた。

「兎」

「 」

「ウサギ」

「カタカナで呼ばないで。ちゃんと、漢字で呼んで」

「はいはい、すみません。うさぎ」

「それはどっかのセーラー服美少女戦士」

同じクラスには、獅子がいた。

獅子は兎が話す、ただ一人のクラスメイトだった。

「シオン、」

「なんでしょう」

「無視して、ごめん」

「無視しようとして、したわけじゃないんでしょう？」

「うん、違うよ」

「なら、謝ることなんてないですよ」

獅子は兎を真っ先に喰らってしまう存在なのに、この獅子はとても優しく兎に接してくれた。それだけ兎はこのクラスの中で獅子を信頼していたし、獅子もまたそれを分かっている、それに応えてくれた。

「ソレジャ、ユウイギナナツヤスミヲスゴセヨ」

夏休みが始まった。

学祭が、近い。

兎はいつものように獅子の隣に並んで、軽音部の部室へ向かう。

きっと3組の担任の先生は話が短いから、いつものように部室にはネコがいるだろう。

ネコはきっと、学園祭で演奏したい曲を選びながらキーボードを弾いている。

きっといつも通りだな、と思いながら、兎は獅子と一緒に部室のドアを開けるのだった。

そこにはいつものようにネコがいて、兎に「よ」と小さく右手をあげる。

きつとこれが幸せなんだな

兎は小さく、「よ」と右手を返した。